



読書の秋がやってきました。まだまだ暑い日も続きますが、夜はずすしくなってきたのではないのでしょうか。

そんな夜に月の光を感じながら、月の本を読んでみませんか。

『ぼく、お月さまとはなしたよ』



フランク・アッシュ/えとぶん  
ひょうろんしゃ 評論社 E/A

あるよること、クマくんはお月さまをみあげて、お月さまにたんじょう日のおくりものをあげたいな、とかんがえました。そこでクマくんは、川をわたり、森をぬけ、山のちようじようでお月さまにはなしかけます。

『お月見テンテン』



はちかいみみ さく 蜂飼耳/作  
こうだんしゃ 講談社 913/は

9月の十五夜の夜、さやは近所のねね子さんの家でお月見を楽しみます。ススキをとって、おだんご食べて。気になる草太も一緒なので、なんだかドキドキです。すると宇宙人もあらわれて・・・。

『月はぼくらの宇宙港』

さいきかずと さく 佐伯和人/作  
しんにほんしゅつばんしゃ 新日本出版社 44/す

人類が広い宇宙へと旅をしようとするとき、地球からもっとも近い天体である月は、その旅の港となるでしょう。それは近い未来。そしてそこで働いているのは、あなたかもしれないし、あなたの子どもかもしれません。

低学年向け

高学年向け

『おつきさまのやくそく』

ちよ イトウひろし/著  
こうだんしゃ 講談社 913/い

こんや、ぼくはひとりですばんをしなければなりません。おひさまがしずんで、あたりがすっかりくらくらになったころ、おつきさまがぼくのうちにあそびにきてくれました。いっしょにあそんで、たのしくすごしたころ、おとうさんがかえってきて・・・。

『月の満ちかけ絵本』



おおえだしろう ぶん さとう 大枝史郎/文 佐藤みき/絵  
あすなるしょぼう 44/お

むかしは電気の明かりはなく、明かりでもあった月を、したしみをこめてながめました。日ごとの月に名前をつけたり、お祈りをしたり、月の満ちかけで日を数えたり。そんなむかしの人の気持ちを思いながら、読んでみませんか。

『ドリトル先生月へゆく』

せんせい つき ヒュー・ロフティング/作  
いわなみしよてん 岩波書店 93/ロ

どうぶつ はな いしや せんせい つき 動物と話せる医者・ドリトル先生が月に着きました。まだ人類の誰も、月世界がどんなところか知らない頃に書かれた、このワクワクする月探検のお話を読んでみてください。ドリトル先生が月に行くまでの『ドリトル先生と月からの使い』、帰ってきたあとの『ドリトル先生月から帰る』もぜひ。